

松橋幸一著『港湾物流管理論』

富田功

(財)港湾労働経済研究所

1. プロローグ

著者は現在、横浜港湾カレッジ（雇用促進事業団神奈川総合高等職業訓練校）の教導として物流管理論等を担当される一方、若人カレッジ生の教育面でも最大限情熱を注がれている方である。対外活動の面では、当学会の理事・会計幹事として三村真人事務局長、小林照夫年報編集委員長ともどもその重責を担われており、筆者は常日頃より一会员としてその積極的な奉仕活動に対し心より有難く感謝している。

こうした状況下にあって、なお研究活動の面でも著者が全精力を傾注されていることはこれまでの主要な研究業績*から十分窺い知らされるであろう。そして、このたび上梓された『港湾物流管理論』はなによりもその証左であると思う。著者のこうした研究活動の弛まざる前進に対して、筆者は心から敬意を表したい。

著者の現実の港湾活動に対する研究の原点は、どこにあるのであろうか、と筆者は本書を読んでからこの点につよい関心を抱かさせられた——それはおそらく、これまでの著者の以下のような問題意識に集約されているように思われる。

『私が港湾の荷役のしごとをするようになってから、荷役作業の技術を解説した書籍を求めたが、それが全く見当たらず、驚いたものだった。世間一般からは、港湾全体が後進的であるかの印象を与えているが、こと荷役に関する限り、その技術には目を見張るべきものがある。』(下記研究実績①、はじめに)

『港湾労働を「人」の問題として把握した時に、その「人」がより有意義な人生を経験するには、港湾のどのような部分が教育の対象となり得るのか。どのように体系づけられるのがより効果的か。そしてそれは社会にとってより有用であろうか。』(同上②、150ページ)

『港における教育・訓練の中心課題は、港の世界を近代化し、港湾産業を主体性ある近代的産業として確立するために優秀な人材を養成することである。また広くは、わが国における港の科学的な研究をはじめ、港の文化を興隆させるためにも、何よりも港における人的資源の育成が重要であるという認識があつてのことであった。』(同上③、204ページ)

以上のことから著者の、現実の港湾活動を研究対象とした目的意識は、誤解をおそれずに一言でいうならば、港における「人」の変革であり、そのための手段として「教育」や「訓練」が広く社会的により有効性をもちうるのではないか、と。この点は本書にも終始貫して展開されており、私達にもつよい共感を与えずにはおかしいであろう。

* 著者の主要な研究業績

- ①『港湾荷役実務』海文堂、1969年
- ②「港湾労働と教育に関する一考察」(『港湾労働経済研究年報No.1』1976年
財港湾労働経済研究所、所収)
- ③「港の産業」(北見俊郎編『港の社会科学』1979年、海文堂、所収)
- ④「はしけ運送の効果に関する一考察」(『港湾経済研究No.17』1979年、日本港湾
経済学会、所収)
- ⑤「教育と訓練の時代」(港湾産業研究会編『港湾産業活動の課題』1983年、丘
書房、所収)

2. 本書の特質

ここ3年間（昭和55年～57年）わが国では実質経済成長率（4.6, 3.5, および3.7%）に対して総輸送量は低迷し、各々0.7, 2.6, および2.5%減であったといわれている。このことは輸送が漸次量型から質型へ移行してきていることを表わしていると共に、輸送事業の合理化志向型経営が当の需要者側からますます要請されていることを暗示している。その意味からも、輸送事業の経営・管理は、よりいっそう創造的でなければならなくなるであろう。

著者が港湾運送事業（経営）の顧客創造を早くから唱導されていたことは衆知の認めるところである。著者が、本書を上梓された意図も、一つにはこの点が秘められているように思われる——著者は、港湾カレッジの卒業生が将来現場の第一線でどのような指導職種に従事しようとも、広く港湾物流事業の参画者としての意識をもって顧客の創造に努めることこそその本務であろう、と願われている。とくにこの点は、第三章沿岸荷役の計数的観察と処理、第四章パレットボードと能率、第五章フォークリフト荷役、第六章フォークリフト・オペレーターの技術管理、第七章荷役用具、第八章揚貨装置、の随所で看取される。この六つの章は著者の研究プロバーの核をなしているところでもあり、当の研究成果は、他の者が追随しようとしても容易にはしえないであろうほど精確に検証されている。

著者の研究方法は、基本的には観察→実証→仮説→検証であり、わけても著者の観察重視の研究態度には共鳴させられるとともに、当のことから教示させられる点も多

い。たとえば仮定法の有効な使用などはその一例である——仮定法を使用しなければならない箇所と使用してはならない箇所を駁別されている点は、読者に基本的な問い合わせや検証などを想起させるとともに、当の事項について検証する必要のないことなどを提起させてくれるであろう。

著者のそうした研究方法は、主として機械工学論を当の分析用具とされ上記の各章でいずれも港湾と当の物流を透察されており、新しいジャンルとしての港湾物流管理の問題内容や性格などがこのことからもいっそう明確にされていることに気づかされる。したがって、この点は当の新しいジャンルへ取り組もうとする読者の関心を引きつけずにはおかないのである。その意味からしても、著者の新領域への開拓精神は十分達せられたと思わせられる。

著者の旺盛な研究意欲は、上記の各章にとどまらず、第1章港湾荷役の変遷、第2章沿岸荷役の能率の箇所でも十分注がれているように思われる。一つには、ややもすると、史料研究の面で欠落しやすい仮説→検証の過程を著者は怠りなく駆使している。二つには、著者は沿岸荷役作業を単なる現場作業としてではなく、「人」の課業としてみることの目的意識を説かれており、私達はこの点にこそ、著者の思想的基盤の一端が凝集されていることに気づかされる——著者は本章での当の作業の能率指標について、現場指揮にあたる物流管理者の立場でこれを凝視しつつ把握していくことが重要であると指摘されている。とくに本章では、筆者は著者のそうした目的意識につよい共感を覚えさせられたのである。

上述した意味での著者の目的意識は第九章はしけ運送の効果の箇所でも展開されている。今日はしけ運送の効用性は、大きく後退しており、このことから港湾関係者の間で広く関心を集めてきたといわれるはしけの買上げ問題や当の労働者の退職金問題なども、めまぐるしく変化している経済、社会情勢のなかで勢い時流に弾かれた感がないでもない。当時「はしけ運送実態調査」(受託先、財港湾労働経済研究所、財関西物流近代化センター)のワーキング・メンバーとして参画された著者ははしけ運送の効果性をつよく主張されていたが、この点は本書にも以下のように活かされている。『はしけよりもより有利な港湾運送の方法は存在しないのである。運送需要と運送機能の分化、多様化との乖離が問題の根源である。』(187ページ)

著者の慧眼は、終章コンテナの作業の箇所からもうかがわれる。この章では著者は、コンテナ・ターミナル作業における経済性追求の理念を踏まえ、港湾産業にも適者生存の強烈な意識の導入こそ、当の going-concern としての可能な限り発展への途につながるのではないかと示唆されている。『現在、港湾は変貌を遂げつつある。……(港の「人」が知識や技術の……)進歩に、生き甲斐、働き甲斐を感じるために、港湾産業も、自らこうした自助努力が必要である。……(港湾産業は新しい荷役システムとしての一貫シート・パレット・システムなど)進んで先進技術を導入し、港

湾としてのノウ・ハウを育成し、確立すべきであると考えられる。』(199~200ページ)

以上みてきたように、本書では著者の確固たる、裏打ちされた見解が実に明確に、しかも簡潔に全章を通じて展開されている点は、何よりも関係者をして必読される価値が十分あることを暗示しているといえよう。

3. むすびに代えて

本書の底流にある、もしくは当の基盤を支える論理は、主として港湾物流論と物流管理論を連結した分析・叙述に負うところが多いように思われる。しかも、著者は両者の焦点を——港湾で流通する貨物を知識や技術を体得した「人」が管理すること——絞って開題されており、それだけに本書での課題追求の論旨はいっそう説得力のあるものとなっている。その意味では、著者の研究方法は適切、かつ有効なものである、といつても決して過言ではないであろう。しかし、今後港における国際複合一貫輸送時代の急な到来が伝えられる状況下で、関係者が港湾物流管理の方向性や当の方策に迫られるであろうことを想定したばあい、港湾物流管理論は、もっと当のテリトリーを広げて、よりいっそう体系的な分析方法によらなければならないであろう。

それにしても、本書で提起された課題を港の変革という観点から広く関係者の間でも究明していくことは実に社会的に価値あるものといえよう。本書の刊行に対して筆者は心から賛辞を送るとともに、著者の今後の研究成果を待望してやまない。

(丘書房、1983年9月初版、201ページ、定価2,300円)